

長野県更埴市屋代遺跡群

生仁遺跡Ⅳ

—県営ため池等整備事業に伴う発掘調査報告書—

2 0 0 1

更埴市教育委員会



長野県更埴市屋代遺跡群





生 仁 遺 跡 IV

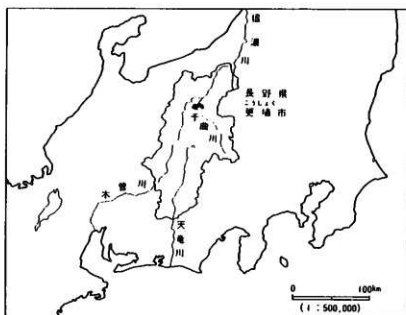
—県営ため池等整備事業に伴う発掘調査報告書—

2 0 0 1

更埴市教育委員会

例 言

- 1 本書は、平成11、12年度に県営ため池等整備事業に伴い実施した、歴代遺跡群生仁遺跡発掘調査報告書である。
- 2 本書の編集は小野紀男が行い、執筆は小野及び東京学芸大学考古学専攻生が行い、文末に執筆者名を記した。
- 3 現場における実測図、出土遺物の実測は担当者及び国光一穂、東京学芸大学生が作成した。
- 4 本文中の遺構、遺物実測図の縮尺、表現は原則的に下記のとおりであるが、一部異なるものがある。
 - ・遺構： 住居跡 1/60 土坑 1/30
 - 遺物： 土器 1/4 石製品 1/1 木製品 1/3～1/8
 - ・遺構図版の  は焼土、 は炭化物を表している。
 - 遺物図版の  は赤色塗彩  は黒色処理を表している。また、須恵器は断面を黒塗りで表現した。
 - ・住居跡の主軸方向はカマド、炉、または北壁を中心に設定した。
- 5 本書中の方位は平面直角座標系第Ⅴ系の座標北を示す。また標高は海拔mで示した。
- 6 本調査に伴う出土遺物、実測図、写真等の資料は全て更埴市教育委員会が保管している。なお、出土遺物には、生仁遺跡を略して平成11年度調査は「NM4」、平成12年度調査は「NM5」と表記した。



更埴市の位置

目 次

例言・目次

第1章 調査の概要	1
第2章 発掘調査に至る経過	3
第3章 遺跡の環境	4
第4章 遺構と遺物	
第1節 竪穴住居	7
第2節 その他の遺構と遺物	11
第3節 自然流路	15
第5章 まとめ	41
付 章 生仁遺跡出土木材の樹種同定	43

写真図版

第1章 調査の概要

- 1 調査遺跡名 厩代遺跡群 生仁遺跡 (市台帳No.31-11)
- 2 所在地及び
土地所有者 更埴市大学両宮学生仁地先
長野県
- 3 原因及び
事業委託者 公共事業＝県営ため池等整備事業に伴う発掘調査
長野地方事務所
- 4 調査の内容 発掘調査約 1,200㎡
- 5 調査期間 発掘調査 平成11年 9月24日～平成11年11月12日
平成12年 4月17日～平成12年 5月24日
整理調査 平成12年 3月 1日～平成13年 3月23日
- 6 調査費用 10,500,000円 (平成11年度 5,500,000円、平成12年度 5,000,000円)
- 7 調査主体者 更埴市教育委員会
- 調査指導 木下正史 東京学芸大学教授
- 担当者 佐藤信之 更埴市教育委員会 (平成11年度)
小野紀男 ※ (平成12年度)
- 調査員 松井一晃 東京学芸大学文化財科学学科大学院生
村井良平 ※
矢島洋子 日本考古学協会員
- 調査参加者 猿渡久人 国光一穂 久保啓子 小林昌子 高野貞子 富沢豊延
中村文恵 堀内広人 宮崎恵子 柳沢君雄
池嶋徹郎 磯野祐輔 佐野貴紀 鈴木一謙 高橋里夏 竹内由香里
立神史香 土屋哲樹 手塚 崇 野中麗奈 吉田正道
東京学芸大学文化財科学学科学生
- 事務局 更埴市教育委員会生涯学習課
教育長 下崎文義
教育次長 滝沢賢二 (竹内幸義 前任者)
生涯学習課長 柳原康廣 (西沢秀文)
文化財係長 金井幸二
文化財係 佐藤信之 小野紀男 宮島裕明 堀内美和
(春原峰子)

8 種別・時期	集落跡	弥生時代～平安時代		
	水田跡	平安時代～近世		
	自然流路	弥生時代～平安時代		
9 遺構・遺物	竪穴住居跡	古墳時代～平安時代	4棟	
	水田跡	平安時代～近世	3面以上	
	自然流路	弥生時代～平安時代	1基	
	土坑		5基	
	溝跡		3基	
	出土遺物	土器片	弥生時代～平安時代	コンテナ40箱
		木製品		コンテナ10箱
金属器・骨角器・石製品等				



第1図 発掘調査風景

第2章 発掘調査に至る経過

平成10年10月、長野地方事務所より雨宮地籍において、排水機場の建設を計画しているとの連絡があった。当該地は歴代遺跡群生仁遺跡内であるため、発掘調査が必要となる旨報告を行った。平成11年4月、長野地方事務所、市農林課、市教育委員会と調査の方法等について協議を行い、調査は平成11年度及び12年度に行うこととなった。市教委ではこれを受け、調査の準備に取りかかった。

平成11年8月2日、長野地方事務所長と更埴市長との間に委託契約が締結され、9月24日より調査に取りかかった。調査では予想されたほどの遺構の検出はなかったものの、現地表下3m程から多量の遺物を包含した自然流路を検出するなど、大きな成果があった。予想外の深さでの調査となったため、出水に悩まされたものの11月12日、平成11年度の調査を終了した。調査期間を短縮することができたため平成11年11月25日、調査費用の減額について変更契約を締結した。

平成12年4月17日、平成12年度分の調査について委託契約を締結し同日より調査に取りかかった。水路部分及び、昨年度検出した自然流路の補足調査を行い、5月24日終了した。

調査日誌

平成11年度	平成12年度
9月21日 重機による表土剥ぎ開始	4月17日 水路部分の重機による表土剥ぎ開始
9月24日 作業員入り、検出作業開始 基準点測量実施	4月18日 作業員入り、検出作業開始 水田面検出
10月6日 東京学芸大学学生調査終了 重機により調査区拡張	4月25日 水路部分調査終了
10月8日 土坑墓検出	5月8日 重機により深掘り開始
10月18日 水田面の調査終了	5月10日 作業員入り、検出作業開始
10月19日 全体写真撮影	5月22日 全体写真撮影
10月25日 地表下3mより多量の遺物 出土	5月23日 作業員終了、機材撤収
10月26日 重機により下層遺構の掘り 下げを行う	5月24日 重機による埋め戻しを終え、 調査終了
11月6日 出土遺物が多いため、土曜 日ではあるが調査を行う	平成13年 3月23日 業務完了報告書提出
11月11日 作業員終了	
11月12日 重機による埋め戻しを終え、 調査終了	
平成12年 3月24日 業務完了報告書提出	

第3章 遺跡の環境

発掘調査地は、東経 138度 9分14秒、北緯36度32分18秒、海拔 353m付近に位置し、長野県更埴市大字雨宮字生仁に所在する。道路は、千曲川が北西から北東に大きく流れを変える部分の東岸に形成された広大な自然堤防上に営まれたもので、周辺の遺跡を含めて厩代遺跡群として把握されている。この自然堤防の南側の後背湿地は「厩代田んぼ」と呼ばれ、古くから水田として利用され、昭和36年から39年にかけて、国内初ともいえる、埋没桑里地割の総合学術調査が行われ、その実態が明らかにされている。

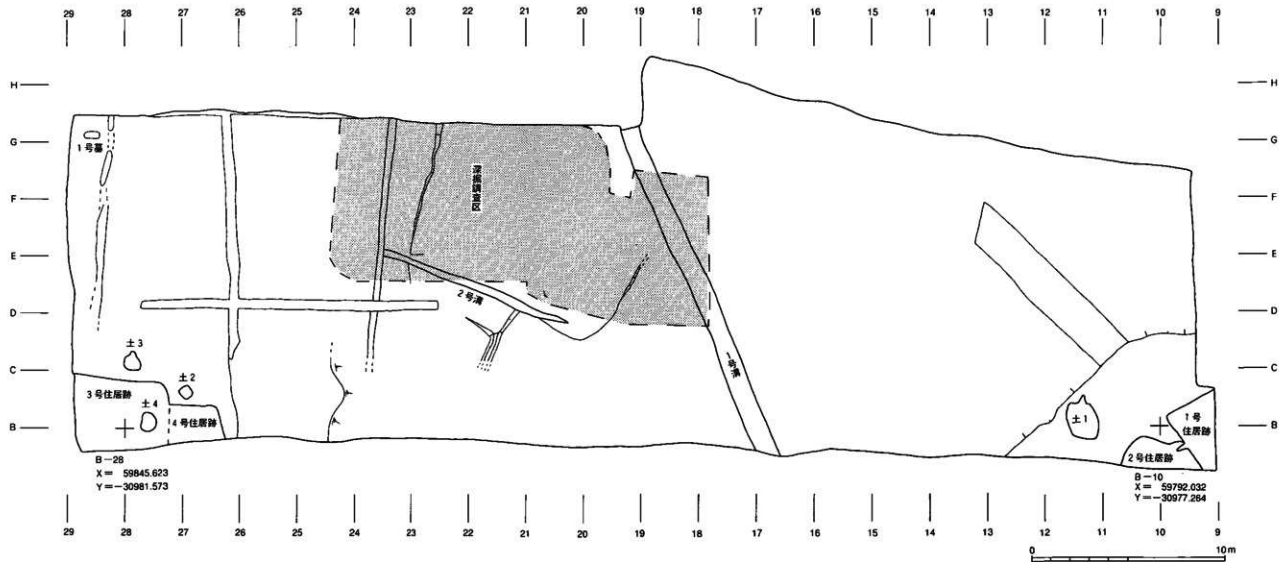
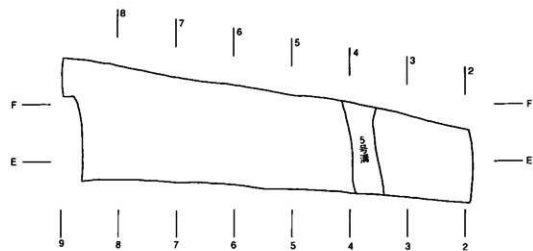
厩代遺跡群は、東西 3.5km、南北 1 kmにわたって展開する更埴市最大の遺跡群で、馬口、城ノ内、町浦、大塚遺跡等が含まれている。上信越自動車道建設に伴い、長野県埋蔵文化財センターによって行われた発掘調査では、国府・郡府木簡を始めとする多量の木製品の出土や、大型の掘立柱建物跡が検出され、また平成7年度から更埴市教育委員会により調査が行われた、国道 403号線土口バイパスの発掘調査では、やはり大型の掘立柱建物跡の検出等と共に、県内では2例目となる唐三彩の出土があり、周辺に官衙が存在していた可能性が指摘されている。

生仁遺跡は、千曲川の自然堤防と沢山川によって形成された微高地の接点にあたっている。調査地周辺では昭和43~44年及び昭和63年に発掘調査が行われ、多くの住居跡などが検出されている。特に骨角製品の残りが良く、ト占骨を始めとする多数の骨角器が出土している。



1 生仁遺跡 2 馬口遺跡 3 城ノ内遺跡 4 町浦遺跡 5 大塚遺跡

第2図 遺跡位置図 (1:20,000)



第3図 遺跡全体図

第4章 遺構と遺物

第1節 竪穴住居

1号住居跡 (第4～6図、図版2・4)

位置：A・B-9 規模：3.60m以上×2.70m以上 平面形：方形

主軸方向：N-20°-W 新旧関係：2号住居跡より新

床面：暗褐色で厚さ6cmほどの貼床があったが、縮まりはなかった。南側が調査区外になるため一部を検出したにすぎないが、ほぼ平坦であった。

壁：ほぼ垂直に掘り込まれ、最大壁高55cmを測る。

覆土：5層に大別でき、I層を除き暗褐色土を主体とする。

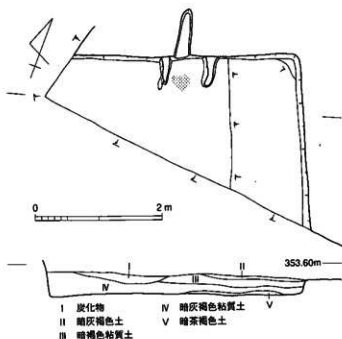
カマド：北壁ほぼ中央と思われる部分に作られており、両袖を検出した。

袖の構築土からは土師器甕の破片が出土していることから、構築材として使用されていた可能性がある。また、西側からは袖石を検出している。煙道は壁面から1.2mほどを検出した。カマド前面には南北50cm、東西60cmほどの炭化物が広がり、その中央から火床を検出した。

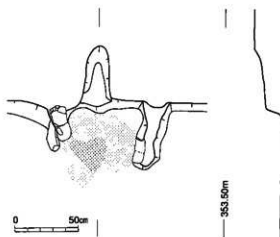
遺物：出土遺物は小破片が多い。

1～4は須恵器環である。1、2の底部には回転糸切痕が残っており、3、4は切り離し後ナデが施されている。5は須恵器环蓋で、外面1/2ほどを回転ヘラケズリしている。6は土師器甕の口頸部であり、内外面共クロナデされている。7は箱清水式の甕であるが、覆土中からの出土であり、混入品と思われる。

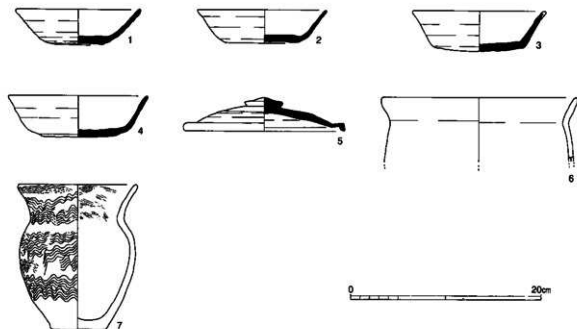
出土遺物から8世紀代の住居跡と思われる。(土屋哲樹)



第4図 1号住居跡



第5図 1号住居跡カマド



第6図 1号住居跡出土遺物

2号住居跡 (第7・8図、図版2・4)

位置：A-9・10 規模：3.80m以上×1.45m以上 平面形：隅丸方形

主軸方向：N-105°-E 新旧関係：1号住居跡より古

床面：暗黄褐色土であり、ほぼ平坦で良く締まっていた。

壁：ほぼ垂直に掘り込まれ、最大壁高40cmを測る。

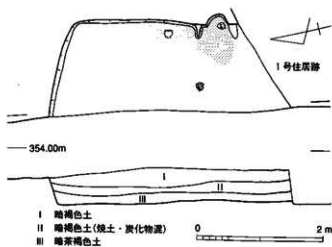
覆土：大別して3層に分けることができ、いずれも暗褐色土を主体とする。

カマド：東壁に位置し両袖を検出したが、南側の袖は1号住居跡構築時に破壊されている。

遺物：1は土師器坏でカマド内から出土している。口縁は内わんする。2、3は土師器甕であり、いずれも平底で2はナデ成形、3の外表面はヘラケズリされている。4はミニチュア土器である。5は覆土中より出土した滑石製の白玉である。

出土遺物や1号住居跡の切り合いから、6世紀末から7世紀初頭の住居跡と考えられる。

(磯野祐輔)



第7図 2号住居跡

3号住居跡 (第9・10図、図版3・5)

位置：A・B-27、28

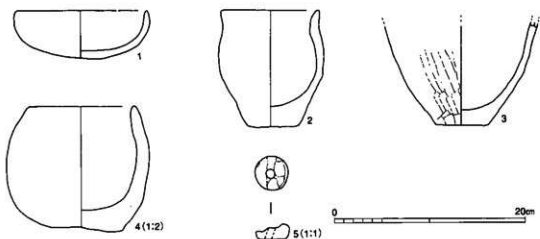
規模：4.90m以上 平面形：隅丸方形

主軸方向：N-100°-E

新旧関係：4号住居跡より新

床面：ほぼ平坦で顕著であり、良く締まっていた。

壁：ほぼ垂直で、最大壁高20cmを測る。



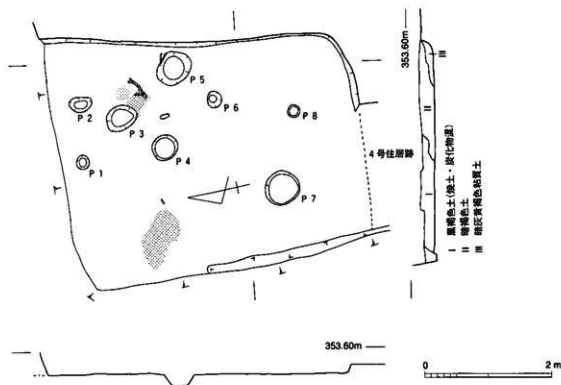
第8図 2号住居跡出土遺物

柱 穴：住居内から大小8基のピットを検出しているが、掘り込みはいずれも浅く、支柱穴と考えられるものはない。またP3は本住居跡に伴うものではないと思われる。

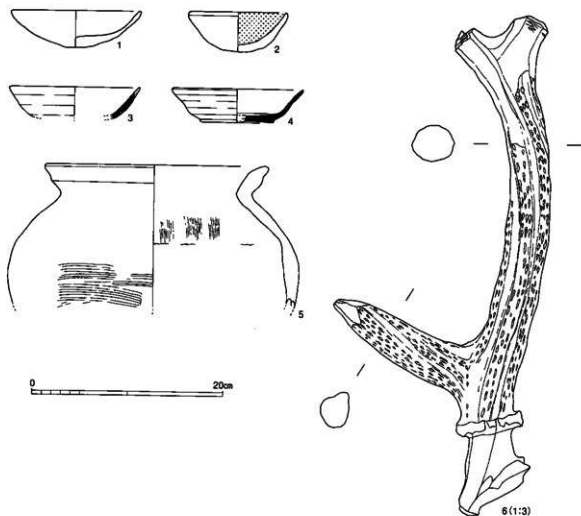
覆 土：大別して3層に分けることができ、I層には炭化物、焼土が多く含まれている。

炉：東壁よりのほぼ中央と思われる地点から検出した。P3により破壊されているが、25cm×50cmほどの楕円形になるものと思われる、掘り込みは認められない。

遺 物：出土量は比較的多いが、小破片が多く図化できたものは少ない。1、2は土師器坏である。内外面とも丁寧にヘラミガキされ、2は内面黒色処理されている。3、4は須恵器坏であるが覆土中からの出土であり、混入品と思われる。5は土師器甕で、口縁に縦い稜が認められる。6は炉に接して出土した鹿角である。先端部が加工されており、その形状から自在鉤であると考えられる。出土遺物から、5世紀前半～中頃の住居跡と考えられる。



第9図 3号住居跡



第10図 3号住居跡出土遺物

4号住居跡 (第11図)

位置：A・B-26・27

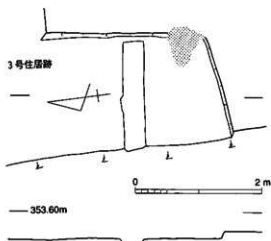
規模：2.60m以上

平面形：隅丸方形

主軸方向：N-100°-E

新旧関係：3号住居跡より古

床面：ほぼ平坦であったが、床面に締まりはなかった。



第11図 4号住居跡

壁：やや角度を持って立ち上がり、最大壁高20cmを測る。南東隅から焼土の集中を検出したが、本住居跡に伴うものか不明である。

遺物：小破片がわずかに出土しているだけであり、図化できたものはなかった。

第2節 その他の遺構と遺物

1号墓 (第12図)

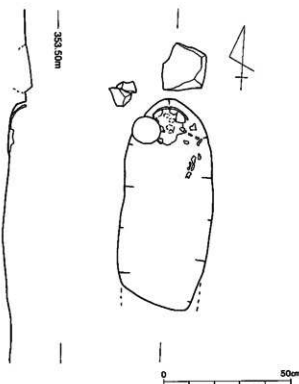
位置：G-28 規模：0.85m×0.40m

平面形：長方形 主軸方向：N

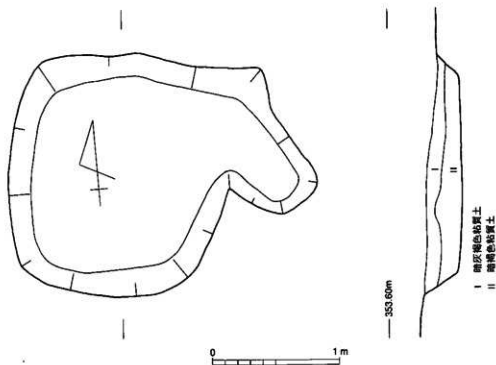
新旧関係：なし

構造：遺構検出時に人骨が出土したことからその存在が明らかとなったもので、掘り込みはほとんど残っていない。水田造成時に削平されたものと考えられる。現存長85cmを測るが、本来1mを越えるものと考えられる。

遺物：頭蓋骨及び歯の一部が出土しているのみであり、他に出土した遺物はない。風化が著しく、骨粉状となっている。また、周囲から拳大～人頭大の石を検出しているが、本遺構に伴うものか定かでない。



第12図 1号墓



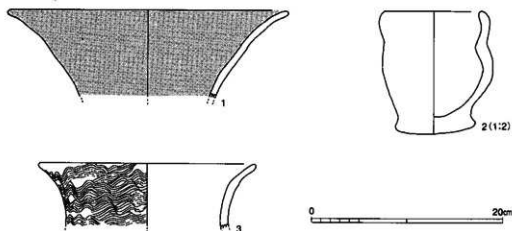
第13図 1号土坑

1号土坑 (第13・14図、図版5)

位置：A・B-11 規模：2.45m×1.90m 平面形：不整形

覆土：大別して2層に分けることができ、I層には炭化物、焼土が含まれている。またII層からは骨片が出土している。

遺物：出土量は少ないが、土坑中央部から比較的多く出土している傾向がうかがえる。1は箱清水式の壺の口頸部である。内外面共ヘラミガキされ、赤彩される。2は壺形のミニチュア土器である。3は箱清水式の甕の口頸部であり、櫛描波状文が認められる。



第14図 1号土坑出土遺物

4号土坑 (第15図、図版5)

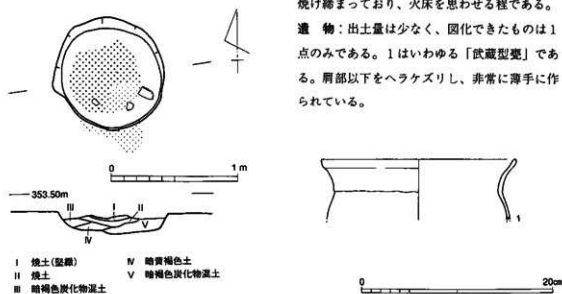
位置：B-27 規模：直径0.90m 平面形：円形

新旧関係：3号住居跡より新

構造：検出面からの深さ15cmを測る円形の土坑である。覆土は大別して4層に分けることができ、

I、II層は焼土である。特にI層の焼土は硬く焼け締まっており、火床を思わせる程である。

遺物：出土量は少なく、図化できたものは1点のみである。1はいわゆる「武蔵型壺」である。肩部以下をヘラケズリし、非常に薄手に作られている。



第15図 4号土坑及び出土遺物

1号溝 (第3図)

位 置：B-G-16-19

規 模：幅1.10m

平面形：直線

主軸方向：N-60°-W

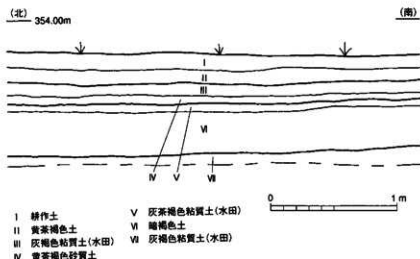
新旧関係：なし

構 造：断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さ80cmを測る。調査区の東端から西端までほぼ直線的に延びている。覆土は粘質土を基本としており、鉄分の付着が認められることから水の流れがあったものと考えられる。

遺 物：土器の小破片がわずかに出土しているだけであり、図化できるものはない。土師質の「かわらけ」が出土していることから、中世以降の溝と考えられる。

水田面 (第16図)

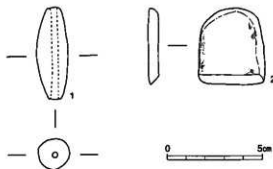
調査区内からは、現水田面を除いて少なくとも3面の水田面を検出した。第16図Ⅲ、Ⅴ、Ⅵ層がこれに該当する。このうち、面的な調査を行ったものはⅥ層の水田面のみである。Ⅵ層水田面からは、数は少ないものの弥生時代～平安時代の遺物が出土している。Ⅵ層水田面の下層からは弥生～平安時代にかけての自然流路が検出されていることから、平安時代以降の水田面と考えられる。また、中世以降と考えられる1号溝はⅢ層水田面を掘り込んで作られていることから、Ⅲ、Ⅴ層水田面は中世～近世のものと考えられる。いずれの水田面からも畦畔等の構築物は検出することはできなかった。



第16図 基本層序

その他の遺物 (第17図、図版5)

第17図1は、Ⅵ層水田面覆土より出土した土錘である。全長4.8cm、最大径1.7cmを測ることができる。2はC-27グリッドより出土した軟玉製の偏平片刃玉斧である。色調は濃緑色を呈し、全面丁寧に研磨されており、わずかに擦痕が残っている。



第17図 その他の遺物



第18图 深掘調査区全体图

第3節 自然流路

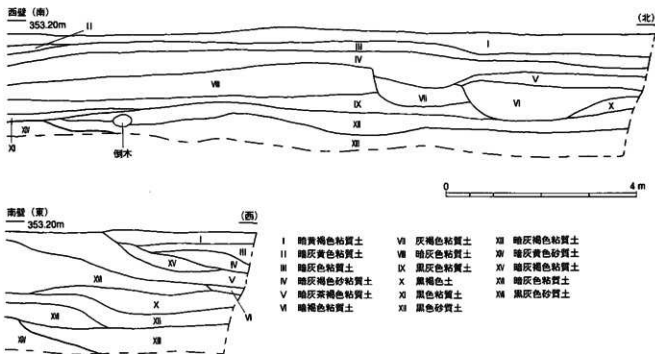
概要

水田面の調査終了後、下層への掘り下げを行ったところ、現地表下約3mから多量の遺物が出土した。このため、機場建設予定地に深掘調査区を設定して下層の調査を行った。弥生～平安時代の土器や木製品、自然木などが多量に出土しているが、すぐ脇を流れている沢山川の河床よりも低位に当たるため、出水がひどく層位的な調査は十分に行うことができなかった。西壁中央付近からは、杭が打ち込まれたままの状態が出土した。N-15° - E前後の方向に少なくとも6本残っており、中には直径20cmを測る太いものもある。

調査区の北端及び南端は微高地となっており住居跡を検出していることから、沢山川が入江状に入り込んだ地点の一部を検出したものと考えられる。検出した杭列は護岸として打ち込まれたものと考えられ、この入江を利用した何らかの施設があったものと考えられる。

層序 (第19図)

覆土は粘質土を主体としており、XII層以下より多量の遺物が出土している。出水の中での調査であるため断定できないが、XII層中からは奈良～平安時代の遺物、XIII層中からは弥生～古墳時代の遺物が主体的に出土している傾向がうかがえる。特にXII層では、木製品を始めとする多量の植物遺体が出土している。XIV層は灰黄色の地山である。



第19図 深掘調査区断面

出土遺物（第20～41回、図版6～20）

本調査ではコンテナ約50箱分の遺物が出土しているが、その大半が自然流路内からの出土である。弥生時代中期～平安時代の土器が出土しており、この他に木製品や石製品、骨角器なども出土している。湿地であるため植物遺体の残りが良く、自然木なども良好な状況で残っていた。

弥生時代（1～21、23～35）

1～18は粟林式土器の破片であり、沈線文、列点文、櫛指文が認められる。19、20は吉田式土器の壺の頸部であり、横位の沈線または櫛指文の下部に鋸歯文が認められる。20は赤彩される。23、24は鉢である。24は内外面共赤彩され、頸部には櫛指波状文が施されている。25は赤彩された有孔鉢である。26～28は高坏である。いずれも赤彩され、28には三角形の透孔が4方向に穿たれている。21、29～33は箱清水式土器の壺である。29、32は小型の壺で赤彩されている。33は大型の壺であり、胴部最大径45cm、現存高52cmを測る。34、35は甕である。頸部には櫛指波状文、口縁部から体部上半部にかけて櫛指波状文が認められる。

古墳時代前期（22、36～55）

古墳時代の時期区分については諸説あるが、ここでは便宜的に屈折脚高坏の出現から消滅までを古墳時代中期、それ以前を前期、以後を後期として分類した。

36、37は鉢であり、口頸部が屈曲し外反している。38～41は高坏である。いずれも裾がラッパ状に大きく開き、38～40の脚部には円孔が3方向に穿たれている。47は直口壺である。口縁部がわずかに外反し、非常に薄手の作りである。53、54はその形状から台付甕の脚部であると考えられるが、台付甕としては非常に大型のものである。

古墳時代中期（56～159）

56～60は土師器坏である。56～58は口径に対して器高が低く、口縁部が内彎する。60は器高が高く口頸部が屈曲し大きく外反する。61～64は球形胴を呈する壺である。65、66は頸部に一段の稜を持った有段口縁壺であるが、段ははっきりとしたものではない。69～96は高坏である。坏部には一段の稜が認められ、ゆるく外反する口縁部となるものが多い。82は箱形を呈している。脚部は筒形で裾部が大きく開いている。83の裾部には段が認められる。93には三角形の穿孔が穿たれている。94、95の筒部および、96の底部には線刻が認められる。筒部内面を除き、全て丁寧にヘラミガキされている。99～104は甕であり、いずれも口頸部が「く」の字に屈曲し外反する口縁部を持っている。体部は球形に近く長胴化はあまり認められない。105～159は球形胴を呈する小型壺である。体部径10cm以下のものを小型壺として分類した。従来、小型丸底土器と呼ばれているものであるが、平底のものも含まれているため小型壺と呼称することとした。形態により、以下の4種類に大別できる。

- ①丸底で口径が体径より大きくなるもの(105～112)
- ②丸底で口径が体径と同じか小さいもの(113～124)
- ③平底で口径が体径より大きくなるもの(152、153)
- ④平底で口径が体径と同じか小さいもの(154～159)

また、147の体部上半には注口状に円形の穿孔が穿たれており、151には赤彩が認められ、体部下半に円形の穿孔が穿たれている。調整はヘラミガキ、ナデ、ヘラケズリ、ハケなど様々であり、器壁も薄いものから厚くずっしりとしているものまで様々である。

古墳時代後期(160～174)

160は土師器坏である。外面にはハケが認められ、底部がやや厚くなっている。161、162は土師器高坏である。坏部内面は黒色処理され短い脚が付いている。165は甌である。166～168は須恵器坏蓋である。166、167の口縁端部には段が認められ、天井部と体部の境界には明瞭な稜があるが、167の稜は鈍いものである。169は須恵器坏身である。口縁端部には段が認められ、受部の稜は短く鈍いものである。170、171は須恵器短頸壺である。いずれも小型品であるが、170の頸部はほぼ直立するのに対し、171はなで肩で頸部は外反する。前者は有蓋、後者は無蓋の短頸壺であると考えられる。172は甌の体部である。ほぼ球形の体部を持ち、上半部には波状文が認められる。173は台付蓋の脚部であり、脚端部は面取りされている。174はその形状は脚であるが非常に小型品であり、何らかの装飾品である可能性がある。

奈良・平安時代(175～192、194～202、204～219)

175～183は土師器坏であり、全て内面黒色処理される。182の底部に回転糸切り痕が残っている他はヘラケズリされている。184は須恵器坏蓋である。端部は強くツマミダシされ、外面1/3ほどを回転ヘラケズリしている。185～212は須恵器坏身である。186～188は立ち上がりが垂直に近く、箱形の形状を呈している。189、190は底部を回転ヘラケズリしており、191～210には回転糸切り痕が残っている。213は須恵器鉢、214は須恵器短頸壺であり、胴上部には櫛描波状文が描かれている。215は把手付壺、216～218は長頸壺である。219は横瓶である。外面にはカキメ及び平行タキが認められ、内面には同心円状の当具痕が残っている。胴部中央の接合部で分離しており、接合部のみ器壁が厚くなっている。

文字関連遺物(193、203、220～235)

220、221は須恵器坏を利用した転用甕である。220は底部内外面共良く研磨されており、外面には墨痕が残っている。221も底部内外面共良く研磨されており、両面に墨痕が残っている。坏部の立ち上がりは意図的に打ち欠かれたものと思われる。222～224は土師器、193、203、225～235は須恵器の墨書土器である。判読できる文字は「吉」、「加」、「丸」、「氏」、「大」であるが、この他に縦線を数本引いただけのものが比較的多く認められる。235の墨書は文字とも記号ともつかないものである。土製品(236～241、244、245)

236は円筒状の土製品の基底部である。直径30cm以上を測ることのできるものであり、その形態から円筒埴輪とも考えられるが、ハケ等は認められない。外面にはナデが認められ、指頭圧痕が残っている。内面は器面荒れが激しく不明である。237～240はミニチュア土器である。237、238は坏形、239、240は壺又は変形のものである。4点とも丁寧にナデられている。241は土錘であり、表面にはヘラケズリが施されている。244、245は羽口である。両者共、先端部分は被熱を受けていて黒褐色に変色している。

金属器(242、243)

242は鉄斧である。現状では袋部には空洞がなく、また継ぎ目も認められないため、鋳造品である可能性がある。刃部を覆うようにして黒色に変色した部分が認められることから、何らかの付着物があったものと思われる。243は金鍔である。鍔の部分で2つに分離しているが、ほぼ原形を保ち、全長34cm前後を測ることができる。

骨角器(246~248)

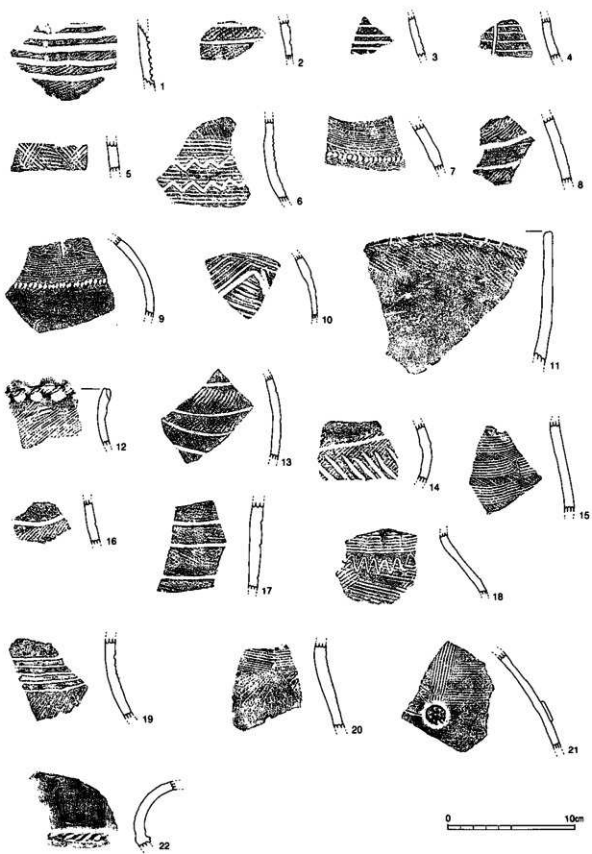
246は把頭である。中央には1.5cm×3cmほどの方形の孔が認められる。表面はていねいに研磨されている。247、248は切断痕のある鹿角である。248と良く似た形状の鹿角が3号住居跡からも出土しており、自在鉤であると思われる。

石製品(249、250)

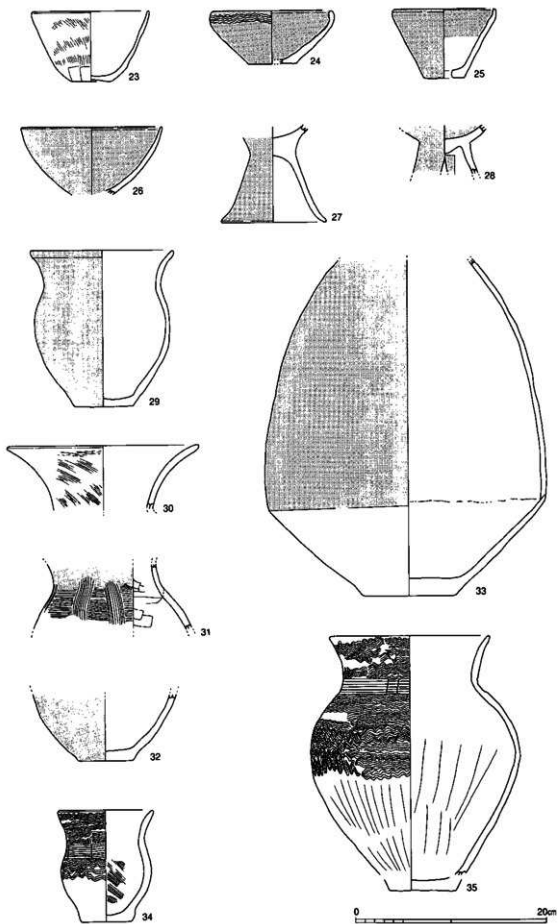
249は紡錘車である。良く研磨されており、表面には擦痕が残っている。250は滑石製の有孔円盤である。一部欠損しているが、ほぼ円形であり2孔が穿たれている。

木製品(251~311)

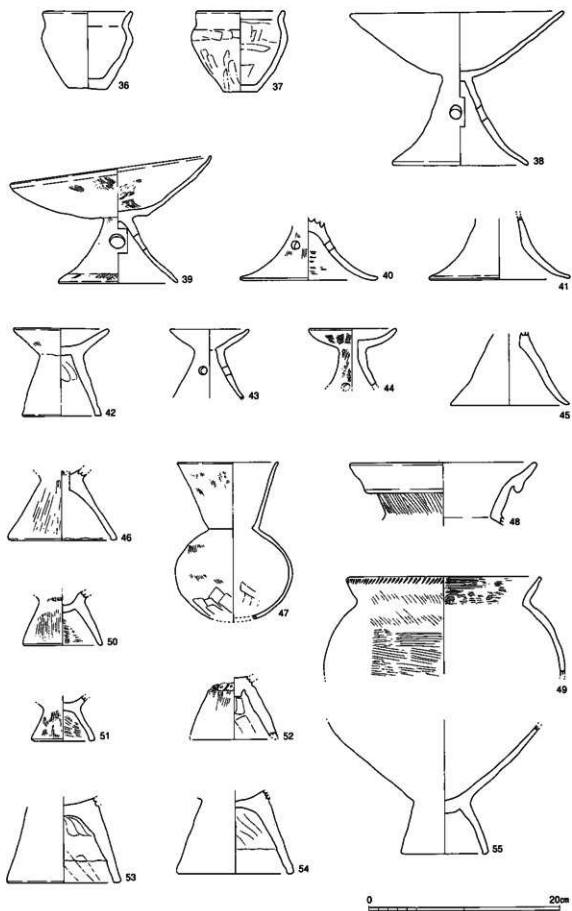
251~253は馬形である。251は完形品であり、全長21cmを測る。254は索車と考えられるが、3か所の切り込みが認められるため蛇形である可能性もある。255は人形の上半部と思われる。頭部の切り込みは明瞭に確認できるが、腕の部分は欠失している。256は壺蓋である。木質部はすでに失われており漆が塗布されたムネ部のみが残存している。15本前後のヒゴを束ね、U字形に折り曲げてムネ部としている。257~262は楯である。260が直柄装着楯である他は曲柄装着楯である。257はほぼ完形のものであり、基部は断面カマボコ形を呈し、下半部には突起が認められる。刃部は精円形をしており、下半部に挟り込みが認められることから、U字形の刃先が装着されていたものと考えられる。258は半分に割れているが又楯である可能性がある。259の基部上端付近には紐掛用と思われる溝が刻まれている。261、262はナスビ形楯である。いずれも欠損品であるが、笠状の突起が大きく張り出した形状をしている。263は横杵である。264は鎌柄である。外反気味の柄であり、両端は円形に削り出されている。長方形の装着孔がやや上向きに穿たれている。265は耳杯である。杯部は精円形をしており、両端に方形の把手が作られている。裏面の脚は幅が狭く長方形になるものと、幅が広く精円形を呈するものとに分かれている。266~269は曲物である。266は側板が残っており、少なくとも3枚の側板によって構成されている。底板とは3か所で木釘で結合されている。267~269は底板であり267は大型で精円形になるものと思われる。270は用途不明品であるが、刀子形である可能性が考えられる。271も用途不明品である。その形状から槍を模したものと思われる。272は弓形の木製品である。断面はほぼ円形であり両端を尖らせている。273、274は先端部を加工した棒状の木製品である。277は腰掛である。座面は緩やかに傾き、脚は座板の長辺側に外開きの状態で作られている。また裏面の両端には方形の窪みが切られている。276もその形状から腰掛の一部であると思われる。278~284は加工材である。285~290は建築部材であると思われる。285は角材であり欠損部には桁穴が切られている。286、287は板材であり、288は断面が菱形となる、292は有頭状の木製品である。293~311は杭である。杭には丸材の先端を加工したもの(293~307)と、割材を利用したもの(308~311)の2者に大別できる。丸材の杭には大型のものが含まれており、293は現存長150cm、299は直径20cmを測ることができる。護岸に打ち込まれたと考えられる杭は全て丸材を使用した比較的大型の杭である。



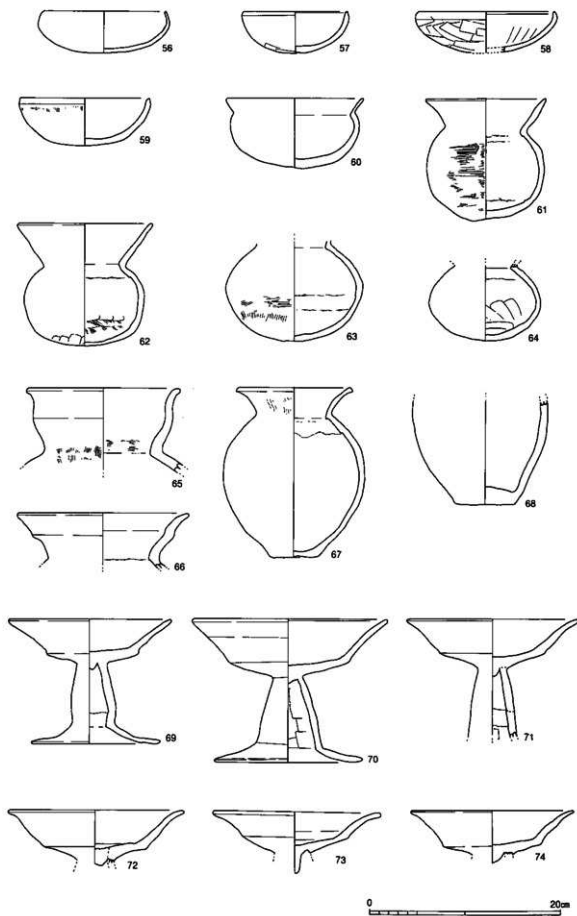
第20图 自然流路出土遺物 1



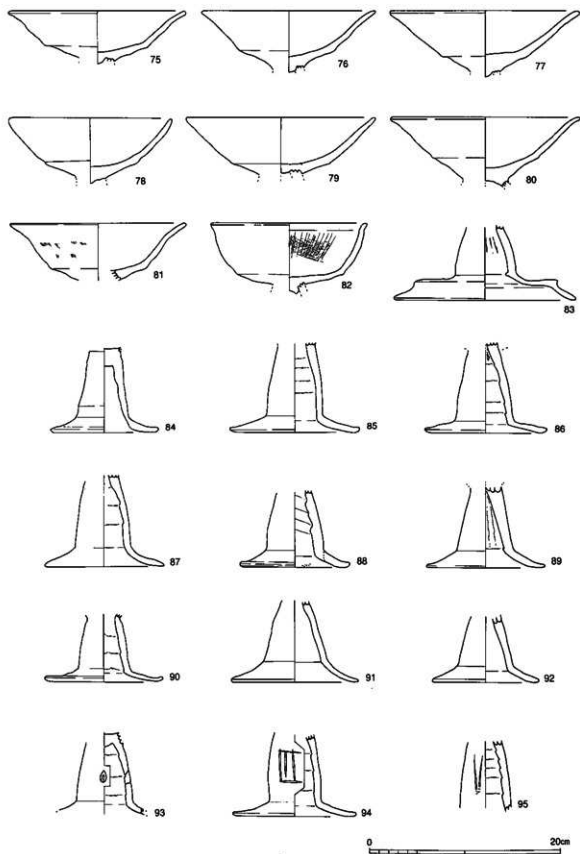
第21图 自然流路出土遺物 2



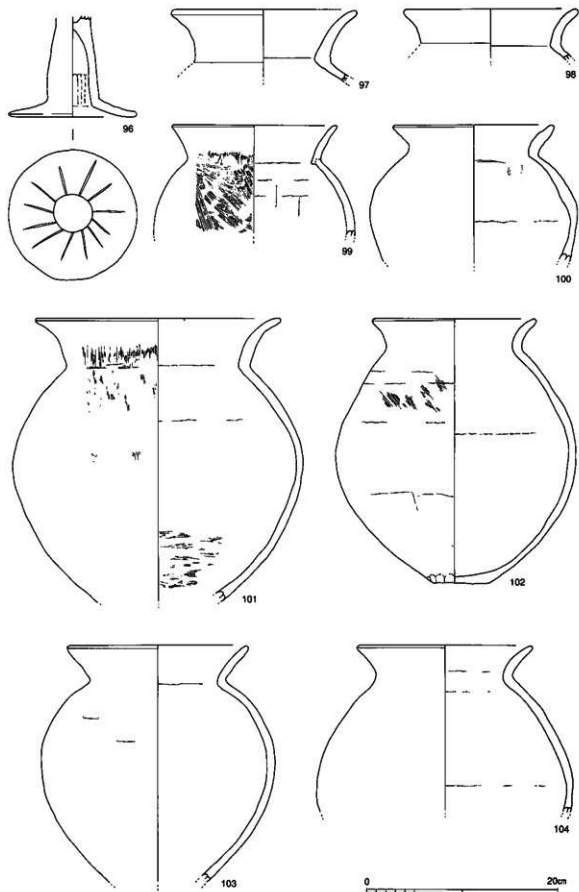
第22図 自然流路出土遺物 3



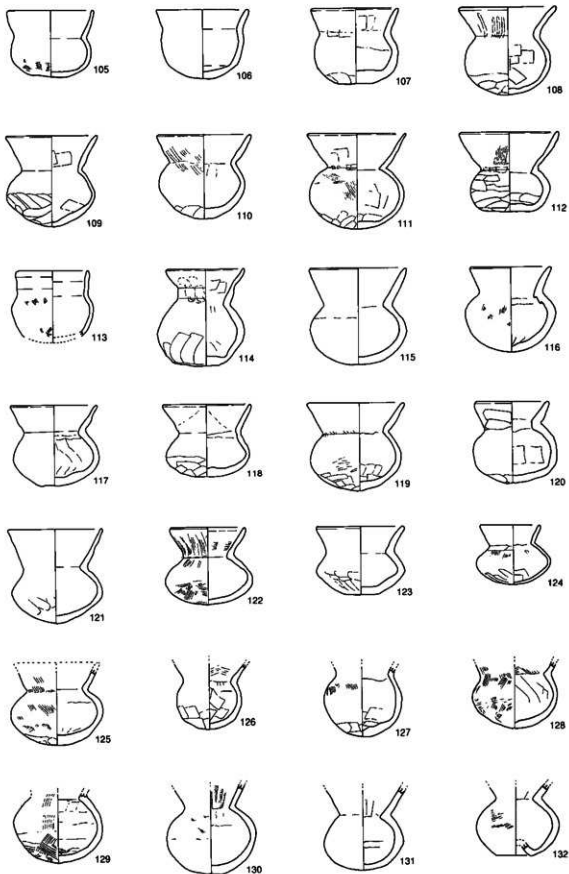
第23圖 自然流路出土遺物 4



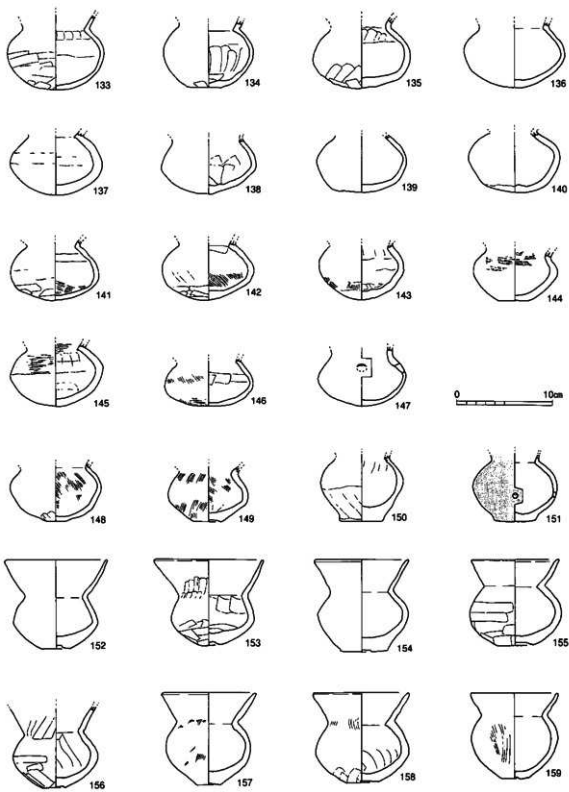
第24圖 自然流路出土遺物 5



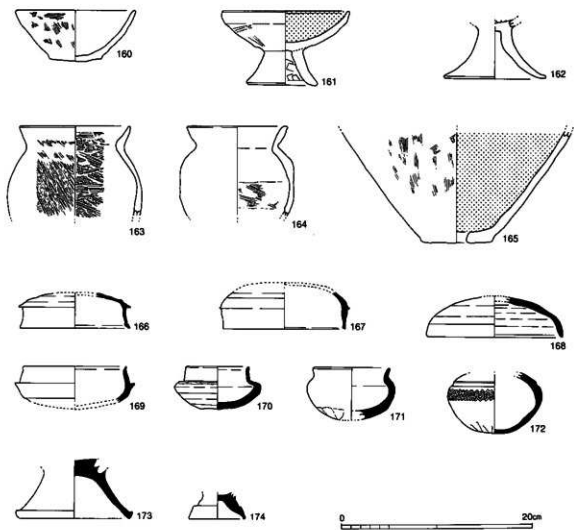
第25図 自然流露出土遺物 6



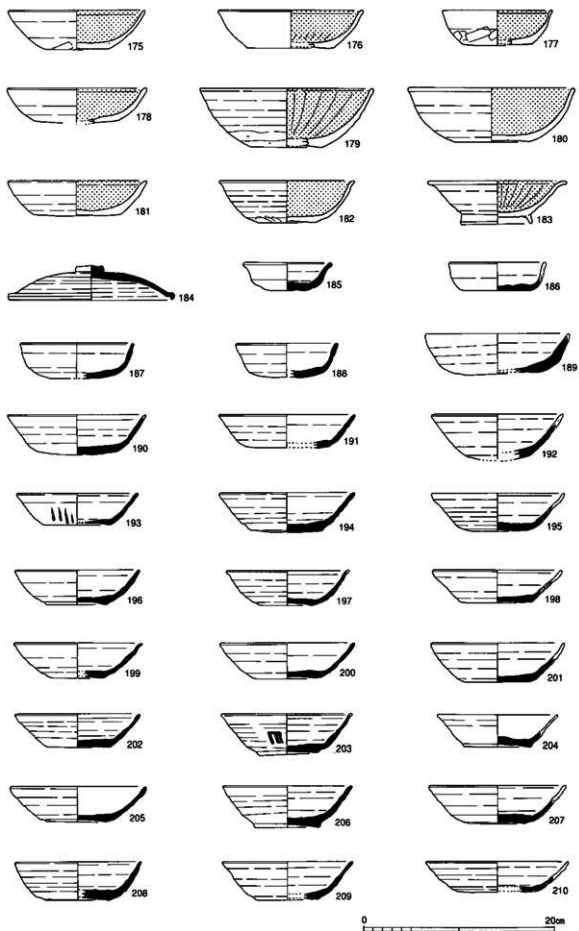
第26図 自然流路出土遺物 7



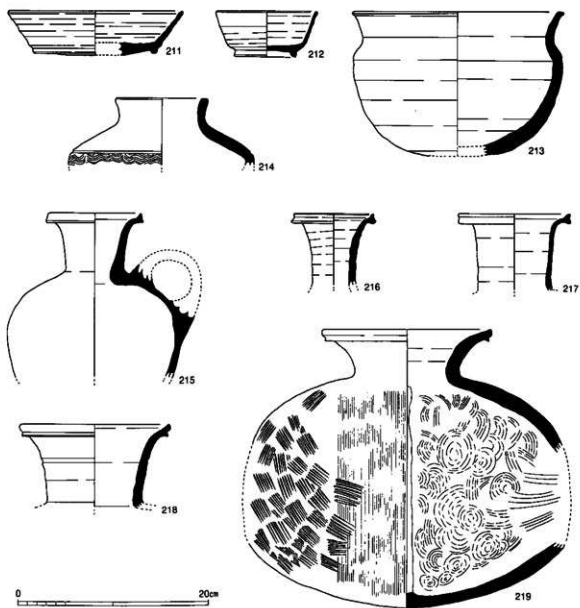
第27图 自然流路出土遺物 8



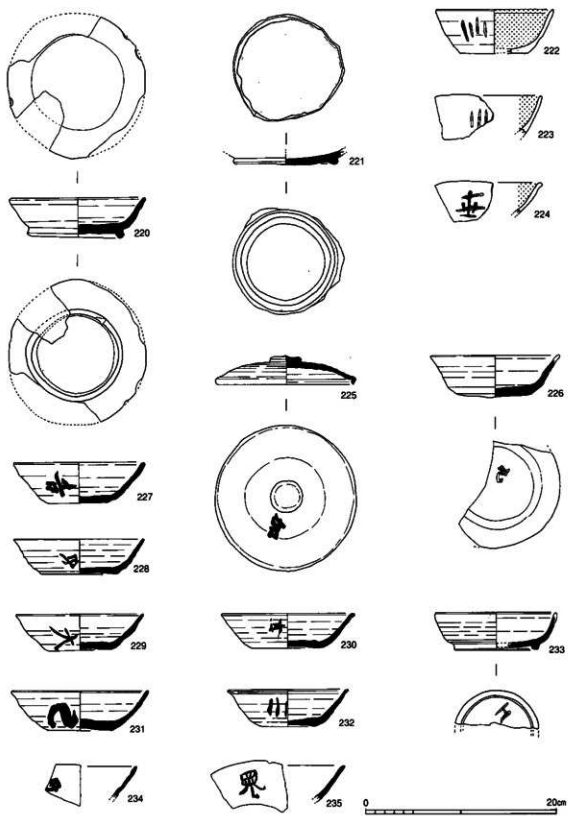
第28圖 自然流路出土遺物 9



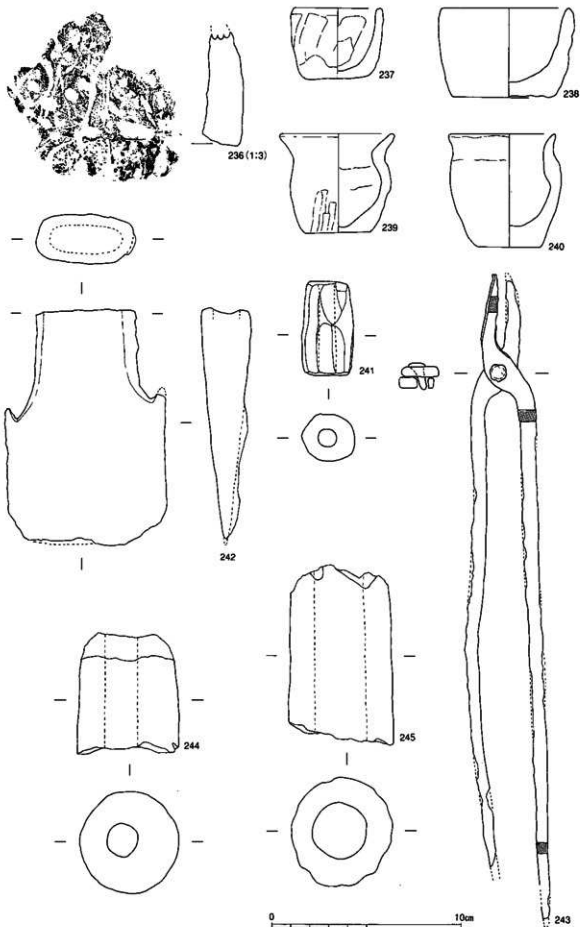
第29図 自然流路出土遺物10



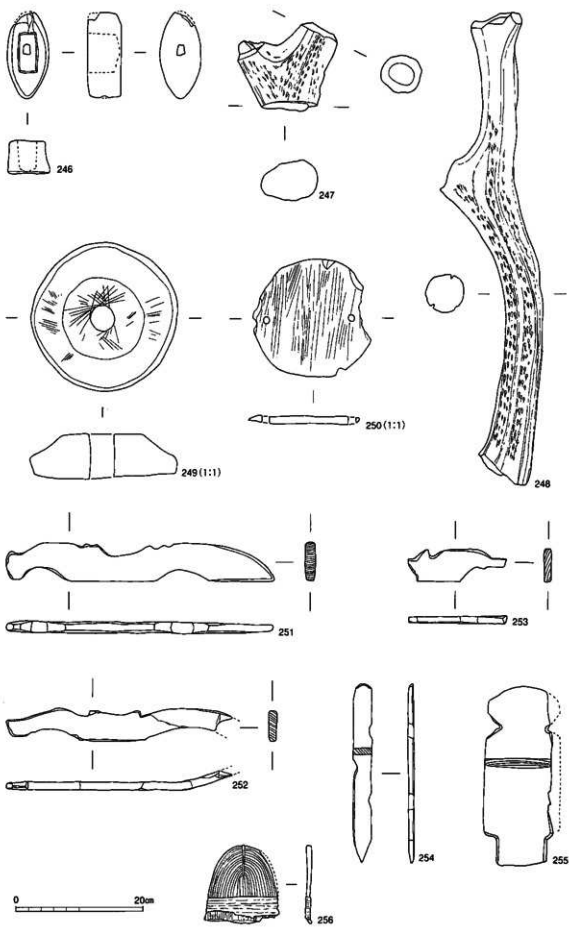
第30圖 自然流路出土遺物11



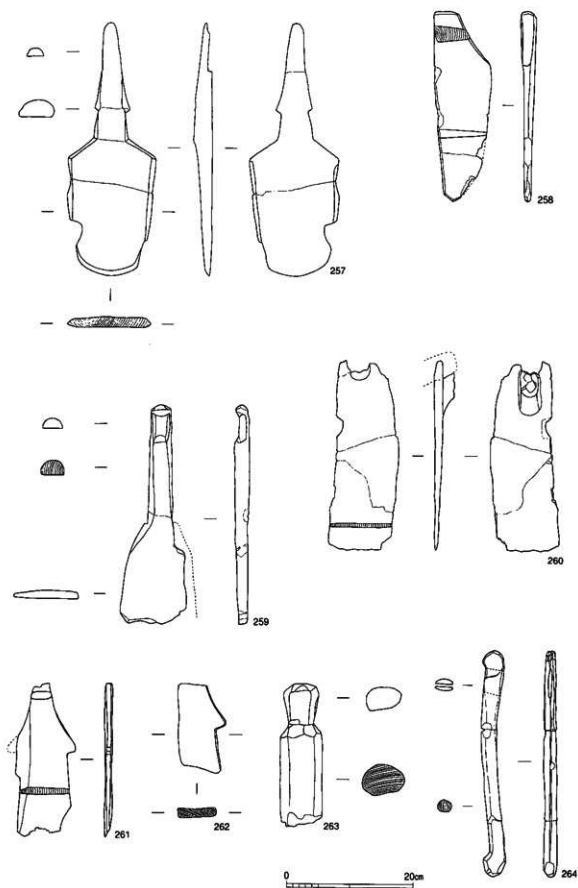
第31图 自然流路出土遺物12



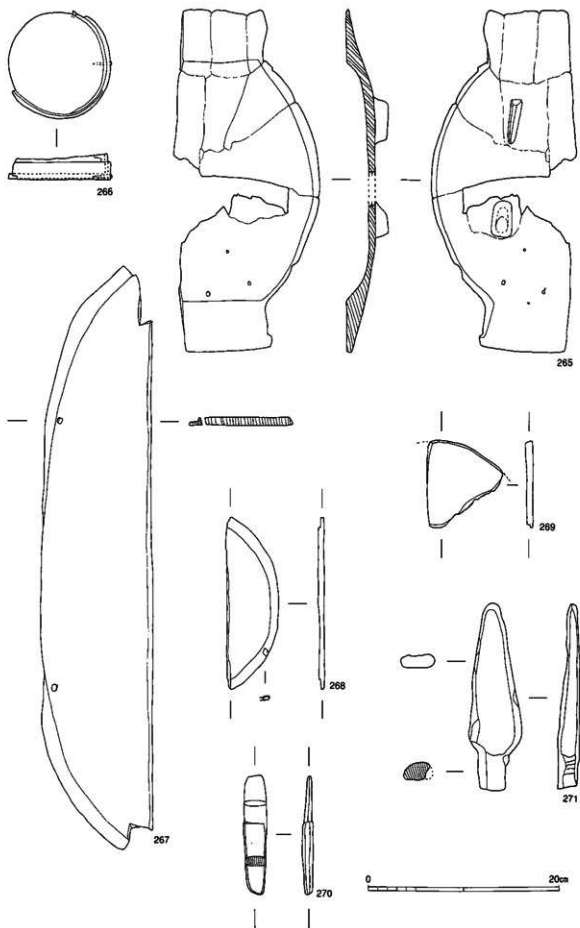
第32図 自然流路出土遺物13



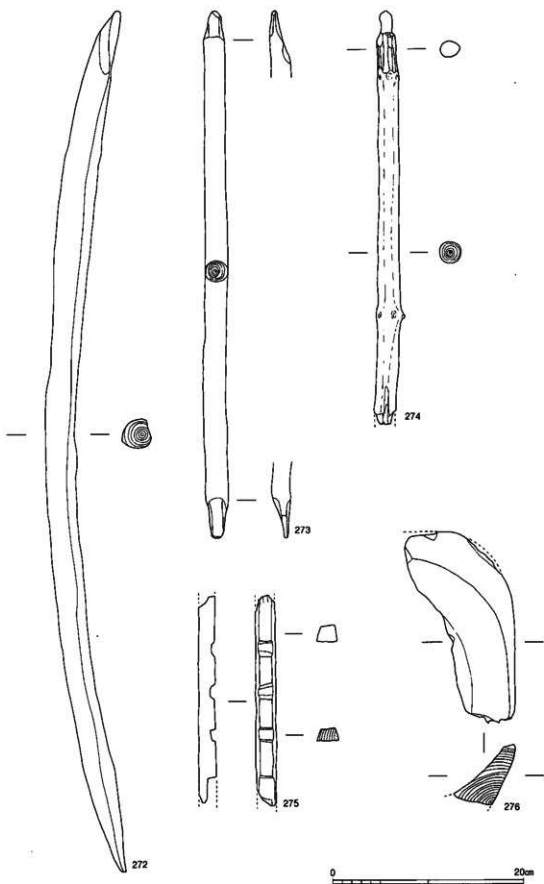
第33圖 自然流路出土遺物14



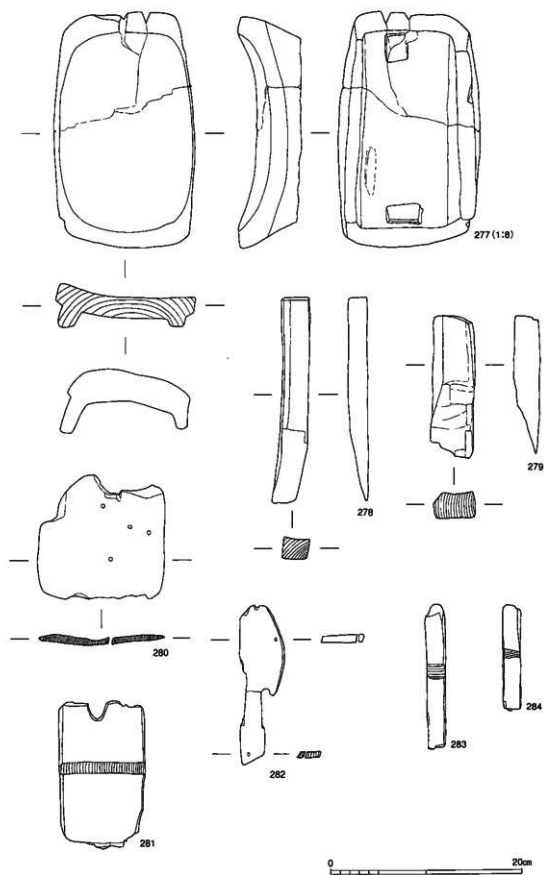
第34圖 自然流路出土遺物15



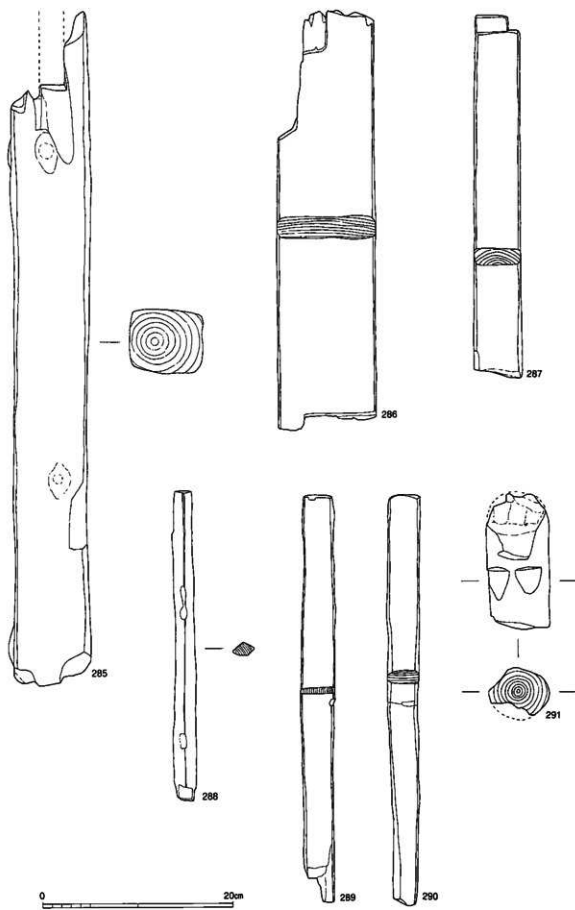
第35図 自然流路出土遺物16



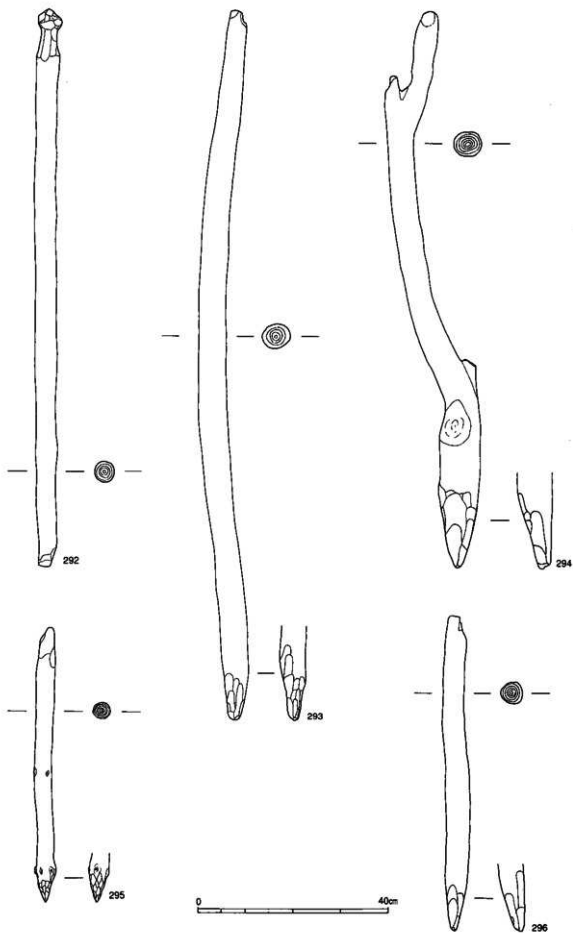
第36图 自然流路出土遺物17



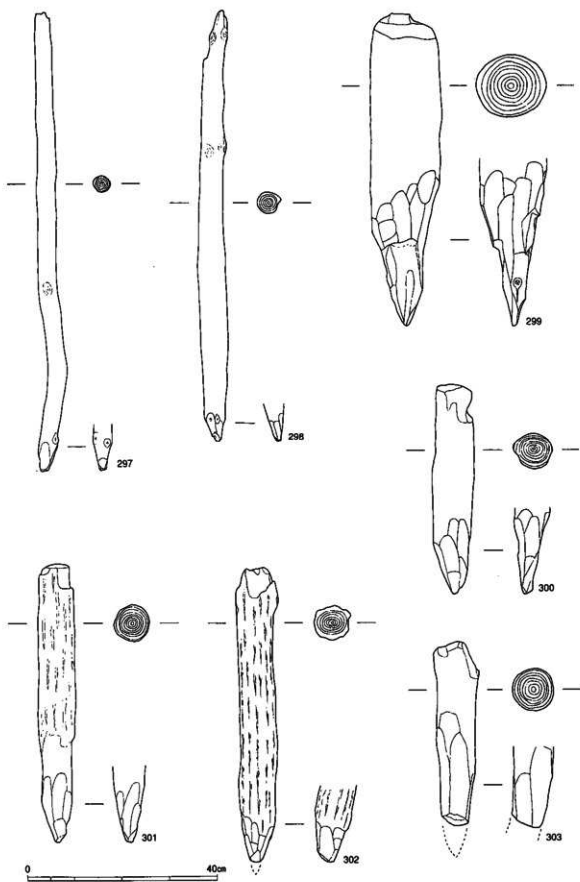
第37图 自然流路出土遺物18



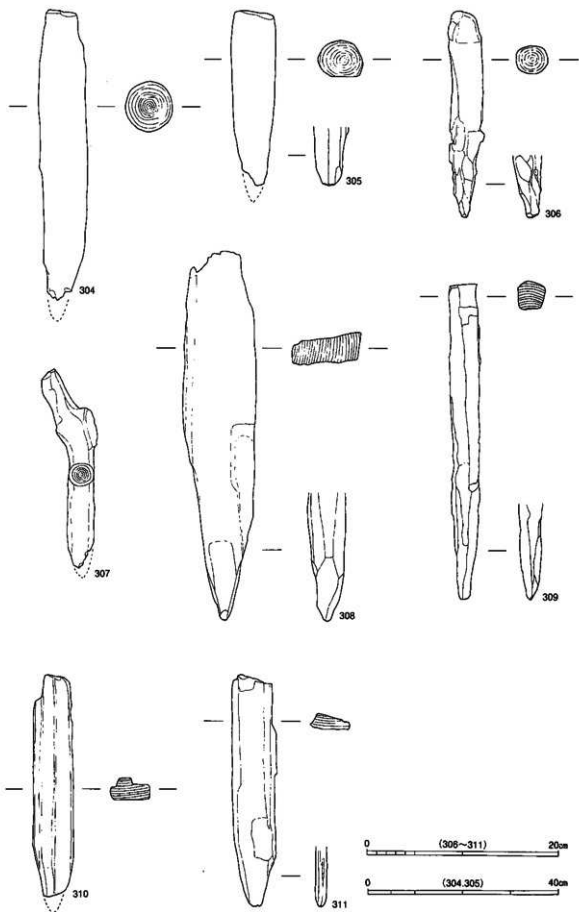
第38圖 自然流路出土遺物19



第39図 自然流路出土遺物20



第40图 自然流路出土遺物21



第41图 自然流路出土遺物22

第5章 まとめ

調査地点は生仁遺跡の南端部に当たり、周辺の調査成果から少なからず住居跡が検出されるものと想定していたが、予想に反して住居跡は4棟を検出したのみであった。しかしながら地表下3mという非常に深い地点から自然流路を検出し、土器や木製品を始めとした多量の遺物が出土した。出土遺物の中には祭祀に関連すると思われる遺物が多く含まれており、水辺に関する何らかの祭祀行為が行われていた可能性が指摘できる。以下、今回の調査で注目された点についてふれ、まとめたい。

1 祭祀関連遺物について

祭祀関連遺物と考えられるものには、小型壺、ミニチュア土器、有孔円盤、馬形、甞申？（蛇形）、人形がある。このうち、最も多く出土しているものは小型壺である。いずれも体部最大径が10cmに満たず、球形胴を呈するものであり、小型丸底土器と呼称されているものであるが、平底のものも含まれているため小型壺と呼称することとした。55個体を図示したが、図化し得なかった個体も含めると100個体を越えるものと思われる。これは壺や甞などの大型品に比して接合や復原が容易であるということを差し引いても、通常の集落遺跡からの出土比率よりも高いと言える。また小型壺の中には甞のように注口を開けたものや体部下半に穿孔を施したものの、赤彩したものも認められる。

多量の土器を伴う祭祀遺構は長野市石川桑里遺跡や、駒沢新町遺跡、中野市新井大ロフ遺跡、松本市高宮遺跡などが知られている。また、水辺に関する祭祀遺構としては長野県埋蔵文化財センターによって調査が行われた屋代遺跡群高速遺地点などがあり、駒沢新町遺跡、高宮遺跡も水辺に関する祭祀遺構であると考えられる。これらはいずれも5世紀前半を中心とする時期に成立したと考えられるものであり、本遺跡例も同様である。高速遺地点では8世紀初頭まで継続して祭祀行為が行われていたと考えられている。本遺跡においても、馬形等の木製祭祀具が出土していることから、比較的長期間に渡って祭祀行為が行われていた可能性が指摘できるだろう。しかしながら、高速遺地点と本遺跡では祭祀の形態に大きな差異があるものと思われる。本遺跡の祭祀の特長は土器を多量に使用することであり、器種の組成の問題があるが高宮遺跡例に通ずるものがある。これに対し、高速遺地点では土器の多用は認められない。高宮遺跡例では自然流路の周辺や流底からも土器が集中して出土しており、本遺跡においても詳細は不明であるが、一括性の高い土器が集中して出土している様子が見える。これらは祭祀の対象が川そのものであり、川に対する何らかの祭祀行為が行われた可能性が指摘されている。一方、高速遺地点における祭祀行為は導水施設を用いたものであり、祭祀の対象は川ではなく水あるいは湧水であると考えられる。

また、昭和63年に実施した調査では集落内より祭祀遺構が検出されている。本調査地点とは若干距離があるものの、出土遺物からはほぼ同時期の祭祀遺構と思われるものである。土器を多用する点は一致するが、高坏や甞が中心であり小型壺は1点のみしか出土していない。土器と共にウマ、イヌの獣骨が供献されていることが特長である。本地点では高坏の出土はあるものの、その出土量は小型壺を凌駕するものではない。本地点における祭祀行為を「水辺の祭祀」とするならば、昭和63年調査の祭祀遺構は「陸上の祭祀」と呼ぶことができるかも知れない。両者の違いは祭祀行為の対象や、祭祀行為の執行者の違いを表しているものとも考えられるが、今後の課題である。

木製祭祀具の出土も注目される。本調査においては、数は少ないものの馬形、人形等の木製祭祀具が出土した。屋代遺跡群内ではこの他に高速道地点や、土口バイパス地点、北野遺跡で木製祭祀具が出土している。本地点を除く3遺跡は千曲川の旧河道からの出土であり、同一流路内の出土である。使用材は高速道地点及び本地点がサワラ材を中心としているのに対し、土口バイパス地点及び北野遺跡ではスギ材を中心としたものである。高速道地点においては、木製祭祀具が集中して廃棄される地点が確認されているようであり、一括性の高い群となっている。使用材が地点によって偏りがあるのはこのような状況によって廃棄されたものと考えられなくもない。しかしながら多量の木製祭祀具が出土している高速道地点の使用材がほとんどサワラ材であることを考えると、時期的な変化を示している可能性もある。

2 木製農具について

高速道路等の建設に伴う大規模な発掘調査によって、普光寺平においても木製農具の出土が増加してきている。本調査地点においても8点の農具が出土している。鋤類は6点が出土し、5点が曲柄装着鋤、1点が直柄装着鋤である。曲柄装着鋤には軸部が笠状に大きく開くナスビ形のもの、軸部が長くその先端部分に溝が刻まれているものの2者が存在する。第34回 257も軸部の突起が小さいもののナスビ形鋤の系譜を引くものと考えられる。ナスビ形鋤は弥生時代後期に成立し、古墳時代全般を通じて全国的に農具の主流となったものである。これに対し、軸部が長く先端に溝が刻まれるタイプの鋤は東海地方に起源を持ち、東海地方を中心として関東、中部、東北地方に分布している。長野県内においては、長野市石川条里遺跡、川田条里遺跡に出土例が見られるものの、農具の主流とはなっていない。石川条里、川田条里遺跡出土の東海系鋤は古墳時代前期の極めて限られた時期にのみ出土するものと考えられており、以後、鋤類の主流はナスビ形のものになるようである。これらのことから、本地点出土の東海系鋤は古墳時代前期に属する可能性が高いものと考えられる。鋤類の内、全容をうかがい知ることのできるものは1点のみであるが、これはU字形の刃先が装着されていたものと思われるものである。U字形刃先は5世紀中頃に出現したと考えられるものであるため、この鋤も5世紀中頃以降のものであると考えられる。本地点出土の農具は比較的長い時間幅を持ったものであるということができよう。

鋤類に使用されている樹種は、コナラ属3点、アサダ2点、カバノキ属1点である。東日本においては、鋤類にコナラ属が多用されていることが知られており、石川条里遺跡出土の鋤類も9割近くがコナラ属で占められている。本地点においては出土点数が少ないため、比較の対象とすることはできないが、アサダがやや多く認められる。

最後に今回の調査に当たり、関係の皆さんの御協力に対し深く感謝申し上げます。

付章 生仁遺跡出土木材の樹種同定

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、その構造は年輪が形成され針葉樹材や広葉樹材でそれぞれ特徴ある組織をもつ。そのため、解剖学的には概ね属レベルでの同定が可能である。なお、木材は大型の植物遺体であるため移動性が少なく、堆積環境によっては高い森林植生を推定することが可能である。考古学においては木材の利用状況や流通を探る手がかりになる。

2. 試料

試料は生仁遺跡出土の自然木10点、杭材18点、木製品39点の計67点である。

3. 方法

カミソリを用いて、試料から新鮮な木材の横断面（小口）、放射断面（柃目）、接線断面（板目）の基本的三断面の切片を作成し、生物顕微鏡によって60～600倍で観察した。樹種の同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4. 結果

結果を表1に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

a. カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc. イチイ科 写真1

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭く年輪界は比較的不明瞭である。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～4個存在する。仮道管の内壁には、らせん肥厚が存在し2本対になる傾向を示す。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、仮道管の内壁には2本対になる傾向を示すらせん肥厚が存在する。

b. イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* K. Koch イヌガヤ科 写真2

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の幅は非常に狭く、樹脂細胞が散在する。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、トウヒ型で1分野に1～2個存在する。仮道管の内壁にらせん肥厚が存在する。樹脂細胞が散在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1～10細胞高位である。仮道管の内壁にらせん肥厚が存在する。樹脂細胞が多く見られる。

c. モミ属 *Abies* マツ科 写真3

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的緩やかである。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は小型のスキ型で1分野に1～4個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、じゅず状末端壁を有する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

d. ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は極めて狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1~15細胞高である。

e. サワラ *Chamaecyparis pisifera* Endl. ヒノキ科 写真4

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型とスギ型の中間的な型のもが多く、1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

f. ヒノキ属 *Chamaecyparis*

横断面、放射断面、接線断面共にヒノキ科の特徴を示し、分野壁孔は1分野に2個存在するが、分野壁孔の型が不明なものはヒノキ属とした。

g. アサダ *Ostrya japonica* Sarg. カバノキ科 写真5

横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは2~5個放射方向に複合してややまばらに散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁には微細ならせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが上下の縁辺部には方形細胞が見れる。

接線断面：放射組織は上下の縁辺部が方形細胞からなる異性放射組織型で、1~3細胞幅である。

h. カバノキ属 *Betula* カバノキ科 写真6

横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは放射方向に数個複合して、ややまばらに散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は8~20本位である。放射組織は同性である。道管と放射組織の間の壁孔は極めて小さく密である。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、1~3細胞幅である。道管相互の壁孔は極めて小さく密に配列する。

i. コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科 写真7

横断面：年輪の始めに大型の道管が1~2列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

j. コナラ属クスギ節 *Quercus sect. Aegilops*. ブナ科 写真8

横断面：年輪の始めに大型の道管が1~2列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が単独でおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものど大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

k. ニレ属 *Ulmus* ニレ科 写真9

横断面：中型から大型の道管が、年輪の始めに1～3列配列する環孔材である。孔部外の小道管は多数複合して花束状、接線状、斜線状に比較的規則的に配列する。早材部から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は同性で、全て平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、1～5細胞幅程度である。

l. ケヤキ *Zerkova serrata* Makino ニレ科 写真10

横断面：年輪の始めに大型の道管が1～2列配列する環孔材である。孔部外の小道管は多数複合して円形、接線状ないし斜線状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部のものは方形細胞でしばしば大きくふくらみ、中には結晶を含むものがある。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、上下の縁辺部の細胞のなかには大きくふくらんでいるものがある。幅は1～8細胞幅である。

m. サクラ属 *Prunus*バラ科 写真13

横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは2～3個放射方向および斜め方向に複合して散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は同性に近い異性である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、1～4細胞幅である。

n. トチノキ *Aesculus turbinata* Blume トチノキ科 写真14

横断面：小型でやや角張った道管が、単独ないし2～数個放射方向に複合して密に散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。放射組織と道管との壁孔は小型で密に分布する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、層階状に規則正しく配列する。

o. ニワトコ *Sambucus racemosa* L. subsp. *sieboldiana* Hara スイカズラ科 写真15

横断面：小型でやや角張った道管が、2～数個複合し、それらが斜め斜線方向に配列する傾向を示す散孔材である。晩材部ではごく小型で方形の道管が、年輪界にそって多数複合し、帯状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は多列の異性放射組織型である。幅は1～4細胞幅で不揃いな精細胞を持つ。

p. ヤマグワ *Morus austral* Poiré クワ科 写真11

横断面：中型から大型の丸い道管が年輪の始めに単独あるいは2～3個複合して配列する環孔材である。孔部外の小道管は複合して円形の塊をなす。道管の径は徐々に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部の1～3細胞位は直立細胞である。

接線断面：放射組織は上下の縁辺部が直立細胞からなる異性放射組織型で、1～6細胞幅である。小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

q. カエデ属 *Acer* カエデ科 写真12

横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは2～4個放射方向に複合して散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、内壁には微細ならせん肥厚が存在する。放射組織は、平伏細胞からなる同性である。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で1～6細胞幅である。道管の内壁には微細ならせん肥厚が存在する。

r. 環孔材 ring-porous wood

横断面：年輪の始めに大型の道管が1～数列配列する環孔材である。孔圈部外道の管は厚壁で単独および2～3個放射方向に複合して散在する。早材から晩材にかけて道管の径は、ゆるやかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、1～6細胞幅である。

s. 広葉樹 broad-leaved tree

横断面：やや大型の道管が存在するが、その配列は不明瞭である。

放射断面：道管と異性の放射組織が存在する。

接線断面：道管が存在し、放射組織は異性放射組織型で、1～5細胞幅位である。

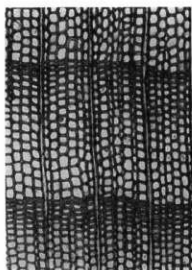
5. 所見

同定の結果、生仁遺跡出土の木材はサワラ8、ケヤキ6、アサダ4、コナラ属コナラ節9、カヤ6、イヌガヤ3、モミ属12、コナラ属クスギ節4、トチノキ2、ヒノキ2、ヒノキ属1、カバノキ属2、サクラ属1、ニワトコ1、ニレ属2、ヤマグワ1、カエデ属1、環孔材1、広葉樹1であった。いずれも温帯もしくは温帯のやや下部に生育する樹木である。木製品にサワラがやや多く、自然木にはケヤキやコナラ属コナラ節がやや多い。サワラが多いのは、本地域における選材の特徴とみなされる。ケヤキやコナラ属コナラ節は自然木であり、周辺に生育していた可能性が高く、周辺にケヤキやコナラ属コナラ節の生育する肥沃な過潤地が広がっていたと推定される。

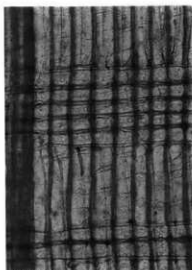
表1 生仁遺跡出土木材の樹種同定結果

図番号	樹種	製品名等	286	モミ属	建築部材
251	サワラ	馬形	287	モミ属	建築部材
252	サワラ	馬形	288	モミ属	建築部材
253	サワラ	馬形	289	サワラ	建築部材
254	サワラ	斎申?	290	モミ属	建築部材
255	ヒノキ属	人形	291	サクラ属	有頭状木製品
257	アサダ	楸	293	イヌガヤ	杭
258	アサダ	楸	294	ニフトコ	杭
259	コナラ属コナラ節	楸	296	カヤ	杭
260	コナラ属クスギ節	楸	298	カヤ	杭
261	コナラ属クスギ節	楸	299	カヤ	杭
262	カバノキ属	楸	300	コナラ属クスギ節	杭
263	サワラ	横杵	301	コナラ属クスギ節	杭
264	ケヤキ	鎌柄	302	コナラ属コナラ節	杭
265	環孔材	耳杯	303	カエデ属	杭
267	ヒノキ	曲物底板	304	ニレ属	杭
270	サワラ	刀子形?	305	コナラ属コナラ節	杭
271	カバノキ属	楡状木製品	306	ニレ属	杭
272	カヤ	弓状木製品	307	アサダ	杭
273	イヌガヤ	棒状木製品	308	ヒノキ	杭
274	イヌガヤ	棒状木製品	309	アサダ	杭
275	モミ属	加工材	311	モミ属	杭
276	トチノキ	腰掛?		カヤ	杭
277	トチノキ	腰掛		コナラ属コナラ節	杭
281	サワラ	加工材		ケヤキ	自然木
283	モミ属	加工材		ケヤキ	自然木
284	モミ属	加工材		コナラ属コナラ節	自然木
	ケヤキ	加工材		広葉樹	自然木
	モミ属	加工材		ケヤキ	自然木
	コナラ属コナラ節	加工材		コナラ属コナラ節	自然木
	コナラ属コナラ節	加工材		ケヤキ	自然木
	モミ属	加工材		コナラ属コナラ節	自然木
	モミ属	加工材		ヤマグワ	自然木
285	モミ属	建築部材(角材)		カヤ	自然木

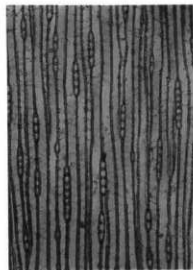
生仁遺跡出土木材の顕微鏡写真I



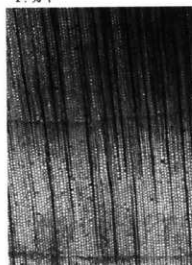
横断面 ————— : 0.2mm
1. カヤ



放射断面 ————— : 0.1mm



接線断面 ————— : 0.2mm



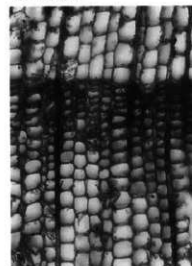
横断面 ————— : 0.5mm
2. イヌガヤ



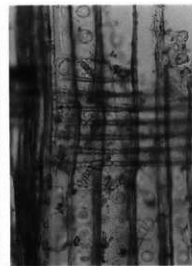
放射断面 ————— : 0.2mm



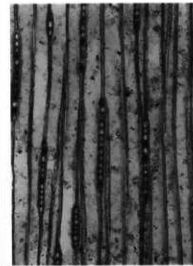
接線断面 ————— : 0.2mm



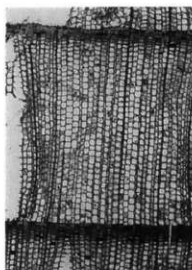
横断面 ————— : 0.2mm
3. モミ属



放射断面 ————— : 0.1mm



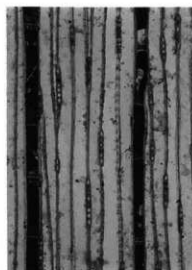
接線断面 ————— : 0.2mm



横断面 ————— : 0.5mm



放射断面 ————— : 0.05mm



接線断面 ————— : 0.2mm

4. サワラ



横断面 ————— : 0.5mm

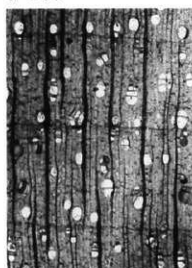


放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.2mm

5. アサダ



横断面 ————— : 0.5mm



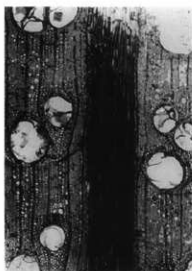
放射断面 ————— : 0.1mm



接線断面 ————— : 0.2mm

6. カバノキ属

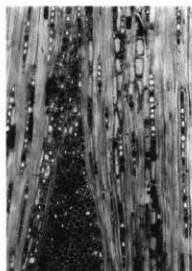
生仁遺跡出土木材の顕微鏡写真Ⅲ



横断面 ————— : 0.5mm



放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.2mm

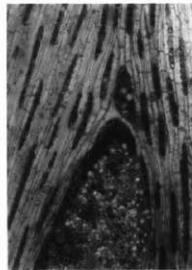
7. コナラ属コナラ節



横断面 ————— : 0.5mm

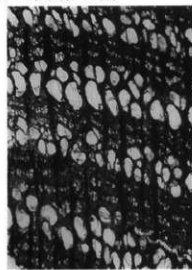


放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.2mm

8. コナラ属クスギ節



横断面 ————— : 0.5mm



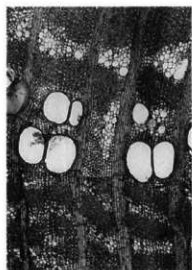
放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.2mm

9. ニレ属

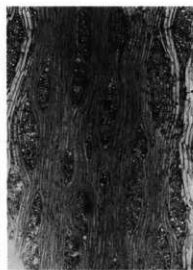
生仁遺跡出土木材の顕微鏡写真Ⅳ



横断面 ————— : 0.5mm



放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.5mm

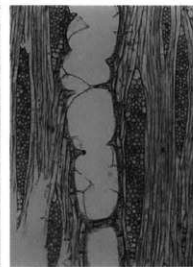
10. ケヤキ



横断面 ————— : 0.5mm



放射断面 ————— : 0.5mm



接線断面 ————— : 0.2mm

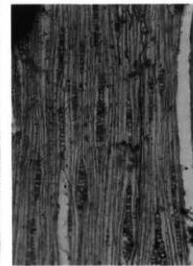
11. ヤマグワ



横断面 ————— : 0.5mm



放射断面 ————— : 0.2mm



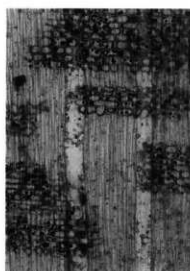
接線断面 ————— : 0.2mm

12. カエデ属

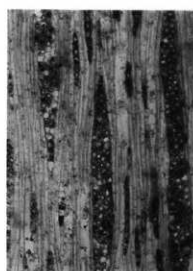


横断面 ————— : 0.5mm

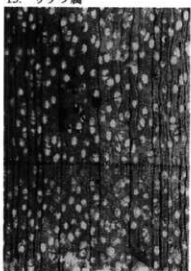
13. サクラ属



放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.2mm

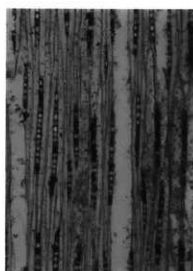


横断面 ————— : 0.5mm

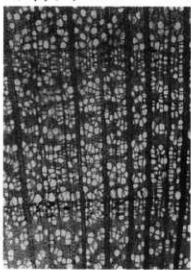
14. トチノキ



放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.2mm

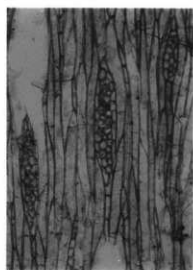


横断面 ————— : 0.5mm

15. ニワトコ



放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.2mm

写 真 图 版



遺跡風景
(北東より)



調査区北側
(南側より)



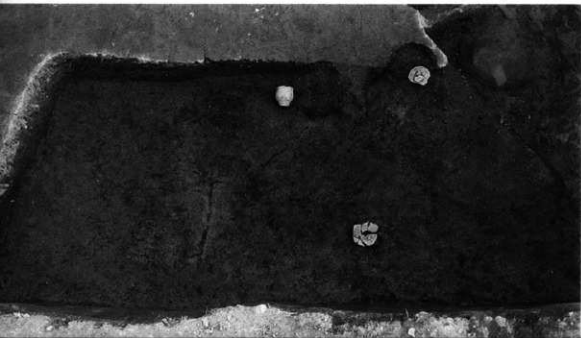
調査区南側
(北側より)



水路部分全景
(北側より)



1号住居跡
(東側より)



2号住居跡
(西側より)



3号住居跡
(西側より)



深掘調査区
(南側より)



深掘調査区
調査風景

图版 4

1号住居跡出土遺物



2号住居跡出土遺物



3号住居跡出土遺物



1



2



3



4



5

1号土坑出土遺物



6



2

4号土坑出土遺物



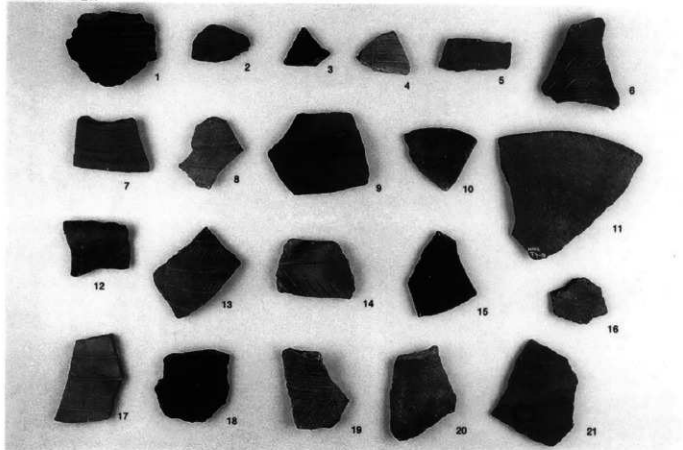
その他の遺物



1



2



23

24

25

26

27

33

34



35



36



37



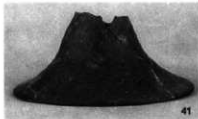
38



39



40



41



42



43



47



53



54



48



55





71



76



75



80



81



82



83



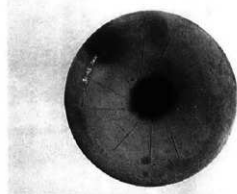
84



85



94



96



99



101



102



103



104



105



106



107



108



109



110



111



112



113



114



115



116



117



118



119



120



121



122



123



124



125



126



128



130



131



147



150



151



152



153



154



155



156



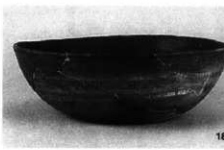
157



158



159





206



207



212



214



215



218



217



221



193



203



222



225



226



227



228



229



230



231



232



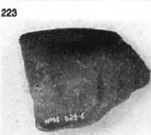
233



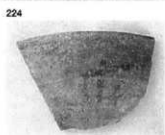
193



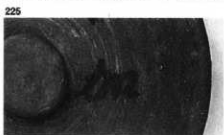
203



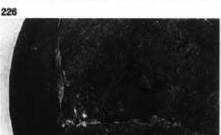
223



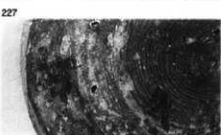
224



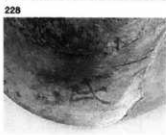
225



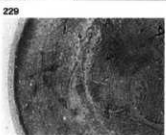
226



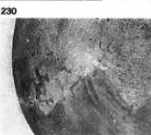
227



228



229



230



231



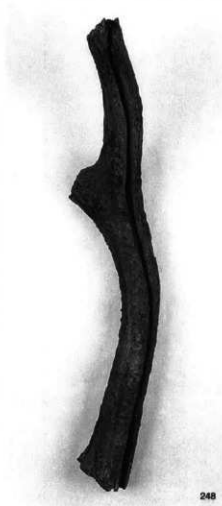
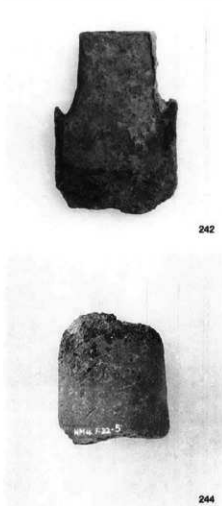
233



234



235





251



253



252



256



254



255



257



259



258



260



261



262



263



264



265



267



266



270



271



273



274



272



275



276



278



279



277



285



286



287



288



291



289



296



299



300



301



302



293



292



294



297



298



305



308



309



303



304

報告書抄録

ふりがな	なまにいせき4							
書名	生仁遺跡Ⅳ							
副書名	県営ため池等整備事業に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	小野紀男							
編集機関	更埴市教育委員会 生涯学習課 文化財係							
所在地	〒387-8511 長野県更埴市杭瀬下84番地 TEL026-273-1111							
発行年月日	2001年3月23日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なまにいせき 生仁遺跡	ながのけん こうしやくし 長野県 更埴市 あいのみや なまに 大字南宮字生仁	20216	31-11	36 32 18	138 9 14	19990924～ 20000524	1,200	県営ため池等整備事業に伴う発掘調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
生仁	集落跡	弥生時代	竪穴住居	4棟	弥生土器、土師器、		自然流路より多量の土器、木製品が出土	
	水田址	古墳時代	水田面	3面以上	須恵器、骨角器、石			
		平安時代	自然流路	1基	器、木製品			

生仁遺跡Ⅳ

発行日 平成13年 3月23日

発 行 更埴市教育委員会

〒387-8511 長野県更埴市杭瀬下84番地

電話 (026) 273-1111

印 刷 信毎書籍印刷株式会社

〒381-0037 長野県長野市西和田470

電話 (026) 243-2105
